島崎藤村ノート

――『夜明け前』第一部第一章の改稿――

鈴木昭一

はじめに

『夜明け前』の本文の異同については、すでに多くの指摘がなされている。作品全体にわたるものとしては、新潮社版『島崎藤村全集』第十八巻（昭27・6）の〈作品対照篇〉と、筑摩書房版『藤村全集』第十一巻（昭41・9）第十二巻（昭41・10）の〈校異〉とがある。また諸氏の個々の論稿には部分的な言及がみられる。『藤村書誌』（伊藤一夫―昭48・10）には、

『夜明け前』の本文については、「中央公論」に掲げた初出稿と刊本とでは、かなりの異同がみられ、さらに刊本と部分改訂した改訂本がある。昭和七年一月二十日に第一部、十年十一月二十五日に第一、二部が新潮社より刊行された。初出稿に比べると、字句の修訂だけでなく、章の構成に至るまで、大幅な改訂が施された。同じ十一年七月十四日刊行の改訂本は、一部の修訂を試みたけれども、逆に改悪されたともいい得るような誤記などがあり、十年版の方が信頼度が高い。

と説明されている。

いまは、その全般について触れる余裕がないので、〃章の構成に至るまで、大幅な改訂が施された〃章のひとつである、第一部第一章の異同について考えていきたい。

(一)

第一部第一章は、「中央公論」の昭和四年七月の夏期特別号に第一篇第一章として掲載（連載二回目）された。いわゆる初出稿である。そして第一篇の連載完了（昭7・1）後の昭和七年一月二十日『夜明け前　第一部』として新潮社から刊行された。いわゆる初版

本である。ついで「中央公論」における第二部の連載完了（昭10・10）後の昭和十年十一月二十五日に新潮社から定本版「藤村文庫」第一・二篇として刊行された。いわゆる定本版である。その後、翌十一年七月十四日に、定本版の本文が一部手直しされて改訂本として新潮社から出版された。いわゆる改版本である。この改版本が、新潮社版『島崎藤村集』第七・八巻、筑摩書房版『藤村全集』第十一・十二巻所収の『夜明け前』及び新潮文庫、岩波文庫など所収の『夜明け前』の底本となっている。

ところで、初版本・定本版本・改版本間の本文の異同は部分的なものなので措いて、ここでは、初出稿と初版本との本文の異同をもとに、第一部第一章の本文定着の経緯をみることにする。

第一章の改稿については、すでに大野健二氏が、〈島崎藤村「夜明け前」の成立過程に於ける削除訂正について〉という論文①で言及されている。その論文では、初稿本（初出稿）と初版本との異同を、新潮社版『島崎藤村全集』第十八巻（以下、新潮版十八巻と略記）所収の〈作品対照篇〉と、筑摩書房版『藤村全集』第十一巻（以下、筑摩版十一巻と略記）所収の〈校異〉をもとに詳細に検討を加えられたのであるが、その前提に大きな問題がある。それは、筑摩版十一巻の〈校異〉のはじめに、〃三、＊印の下に、原稿（初出稿）および初版本における異同を掲げた。行末の（原）は原稿を、（初）は初版本を示す。〃とあるのを多分そのまま受けて、原稿すなわち初出稿とされたことである。第一章の場合、初出稿は当然昭和四年七月の「中央公論」掲載のものなので、それが原稿ということになる。筑摩版十一巻にいう〃原稿〃とは、同巻の末尾（五九〇頁）に〈校異〉の補足として、〃本巻で初めて訂正した箇所〃として〃自筆原稿〃による訂正箇所を掲げてあることからみれば、その〃自筆原稿〃を指すのであろう。とすると、筑摩版全集の編集者が、その〃自筆原稿〃を初出稿の原稿と同じものとして、第一章の〈校異〉を説明しているとみることができる。その説明には〃原稿における第一章の一と二は、初版本とのあいだの、したがって本巻の底本とした改版本とのあいだの異同が大きいので、原文をそのまま、左に掲げる。〃とある。その〃原文〃とは〃自筆原稿〃のそれでもあり、初出稿のそれでもあるということになる。

新潮版十八巻の〈作品対照篇〉ではどうなっているのであろう。そこには、〃「夜明け前」の、原稿より本書に到るまでの経過は、次のごとくである。〃とまえがきがあって、次に、〃一、原稿〃として、『夜明け前』が「中央公論」に連載された経緯を述べ、〃（註）〃に、〃この原稿は完成後纒めて大倉聴松（喜八郎）氏に寄贈されたが（略）〃と記し、加えて、〃稿本目次〃その他、藤村の〃添へ書〃などを載せている。つづけて、〃二、初版本〃〃三、定本版「藤村文

庫」初版本〟〟四、定本版「藤村文庫」改版本〟と各項ごとに解説を付し、最後に、〟本書（本全集第七巻・第八巻）〟としたあとに、〟改版本を底本とし、原稿、初出稿（中央公論）、初出稿への手入れによる初版本のための稿本、初版本等を参照した。〟とある。新潮版十八巻ではこのように原稿と初出稿とを別扱いにしている。第一章の一と二の本文の異同については、〟（註―本書一七頁冒頭より二五頁七行目にわたる部分は、原稿との間の変化が大きいので、その部分に該当する原稿をそのまま次に掲げる。〟とあって、筑摩版十一巻のいう〟原文〟と同一の文章が載せられている。その文章は、初出稿の本文と校合すると判然とするのであるが、句読点の有無、語または語句の切れ目、語または語句の脱落・訂正、節の欠落等において、全く同一のものである。したがって、筑摩版十一巻のいう〟原稿〟は、初出稿そのままではないし、初出稿の原稿でもない。一方新潮版十八巻にいう〟原稿〟も初出稿および初出稿のそれでないことになる。

(二)

初出稿と両全集にいう〟原稿〟（以下〟原稿〟と略記）と初版本（定本・改版本を含む）のそれぞれの本文を節ごとに要約したのが、次の表である。

初出稿（「中央公論」昭4・7）	原稿（筑摩第11巻版昭41・9）	原稿（新潮社第18巻版全集昭27・6）	初版本（昭7・1）	定本（昭10・11）	改版本（昭11・7）
一 ◎金兵衛の氏神参拝 ◎黒船の噂、街道の様子	一 同	同	同	同	同
二 ◎馬籠宿駅の概況 ◎金兵衛の本陣立ち寄り おまんとの会話	一 同	同	同	同	同
三 ◎金兵衛の帰宅 お玉との会話 △仙十郎・お喜佐の夫婦仲 △鶴松への心くばり △半蔵の病気	削除（欠落）	上	上	上記二の圏点の箇所のみ、左の三に挿入	削除
四 ◎仕法立（福島） 吉左衛門の帰宅、感慨 ◎金兵衛の招待	二 同	同	同	同	同
五 ◎枡田屋の歴史	三 同	同	同	同	同
六 ◎青山家の歴史	三 同	同	同	同	同
七 ◎水野筑後守の西下 ◎吉左衛門とおまんとの会話	四 同	同	同	同	同
八 ◎半蔵の縁談	四 同	同	同	同	同
九 ◎半蔵の生い立ち	五 同	同	同	同	同
十 ◎半蔵の結婚	六 同	同	同	同	同
十一 ◎半蔵の結婚後の新規な生活	七 同	同	同	三 同	同

※ □内の漢数字は、節を示す。

右表に明らかなように、初出稿の㊂節に相当する本文は〝原稿〟では全く削除（欠落）してある。この点から、もはや初出稿が即〝原稿〟でないこと、またその〝原稿〟が初出稿の原稿とも異なるものであることも判明する。それは、㊂節前後の節分けにもみられることである。初出稿の㊀節・㊁節は、〝原稿〟では㊀節にまとめられてあり、初出稿の㊃節は、〝原稿〟では㊁節に、初出稿の㊄節・㊅節は〝原稿〟では㊂節に、初出稿の㊆節は〝原稿〟では㊃節に、初出稿の㊇節・㊈節は〝原稿〟では㊄節に、初出稿の㊉節は、〝原稿〟では㊅節に、初出稿の㊊節は〝原稿〟では㊆節にというふうになっている。このように〝原稿〟の本文は初出稿のそれと相当に隔っている。ただし、その節の指摘は右表にもことわったように新潮版十八巻になされているだけである。

初出稿の附記（「中央公論」昭4・7）に、〝これで第一章を終る。次男の遠い旅に、青山の親戚の不幸に、これを書きかけてから自分の身のまわりにも種々な変化があったが、まだ梅雨の季節のやって来ないうちにこの章を書き終へたのは仕合せであった。（略）〟とある。〝次男の遠い旅〟が昭和四年三月十一日の鶏二のパリ留学への出発であること、〝青山の親戚の不幸〟が昭和四年五月十三日の長兄秀雄の妻松江の病没であること、それらに〝まだ梅雨のやって来ないうちに〟という文章をあわせると、この第一章の原稿の完成を昭和四年五月下旬ごろと推定することができそうである。それが初稿（第一稿）であり、初出稿に直結するものである。その初稿では、第一章は㊀節から㊊節に分けられていたのである。掲載誌の「中央公論」に異版はないので、[2] そのように考えられる。

それでは、初稿と〝原稿〟とはどのような関係になるのであろうか。以上のことから、〝原稿〟が初稿に先立つものとはとうてい思われない。また、〝原稿〟は新潮社版十八巻にいう〝初出稿への手入れによる初版本のための稿本〟（以下、初版稿本と略記）でもあり得ない。それは、右表の〝原稿〟の㊀節・㊁節・㊂節と初版本の㊀節とのかかわり（異同）に明らかなことである。初版稿本は初稿を改稿した二番目の原稿とみなしうるものである。

第一章を㊀節～㊊節に分けた〝原稿〟の原本は、現在、藤村記念館（馬籠）に所蔵されているのである。[3] それは、前述のように、藤村が昭和十一年大倉喜八郎に寄贈した〝稿本〟であり、戦後、静子夫人のもとに託されたものである。藤村はその〝稿本〟に〝添へ書〟して（昭和十一年五月）、次のように記している。

この作、昭和四年に起稿し、昨十年の九月に書き終わった。この稿本は中央公論誌上に発表した時のもの。これを二部の書籍にまとめて印刷に附した折には、あるひは省いたり、あるひは改めたりした部分もある。

と。文中の〝二部の書籍にまとめて印刷に附した折〟とは定本版刊行時をさすと思われる。〝この稿本は中央公論誌上に発表した時のもの。〟とはこの第一章に関する限りそのままには受け取れない。理由はすでに明らかである。また、第一章の〝稿本〟は、本文の異同からみて、定本版刊行の昭和十年十一月の時点で、初出稿の原稿を〝省いたり、あるひは改めたりした〟ものとも考えられない。

その結果ひとつの仮説がたてられる。〝この稿本〟のうち、第一章に相当する〝稿本〟は、大倉喜八郎への寄贈のおりに、その一部が削除されるか、書き直されたものではないかということである。このようにみてくると、原稿には、初稿（初出稿）、初版稿本、〝原稿〟（〝自筆原稿〟）の三種があるということになる。

(三)

初出稿の㈡節から㈢節までは、右表に表示したように、㈡節の一部分（〝黒船の噂と街道の様子〟）が初版本以下の㈡節にさし換えられただけで全文が削除されているが、両全集には〝校異〟あるいは〝変化〟として、㈡節・㈢節としてその長文が引用されている。

㈡節の冒頭は次のとおりである。

馬籠の宿役人、小竹金兵衛は氏神の参詣を済ました後で、社頭の鳥居に近い杉の切株の上に腰をおろした。いつも村社への参詣といふと、きまりで常用の紙入を懐にしてゐる。その紙入は布で造ってある。裏には木綿更沙がつけてある。それほど持物も質素に、雪踏ばきで、その古い切株に腰かけた。

こうして金兵衛が眼前の街道を見やりながら、嘉永六年六月末の、黒船渡来のもたらした、昨今の街道の変化に思いを致す場面にはじまり、ついで、まず馬籠の宿駅のあらましと、村社からの帰り途、吉左衛門の福島出張中の本陣に立ち寄った金兵衛が留守居のおまんや隠居と交す話とが書かれる。そして㈢節に入り、吉左衛門が福島から仕法立ての用務をおえて帰宅した時の様子が描かれる。ところが、表にみられるように、その〝原稿〟の㈡節と㈢節の間に、初出稿では㈢節が介在しているのである。それは次のように書き出されている。

清酒あり。それを表看板の文字にあらはさないで、金兵衛の家では古風な杉の葉の束であらはしてある。その杉の葉の束は毬（まり）の形に丸く大きく造って、街道に向いた軒先に懸けてある。金兵衛は後妻のお玉を相手に、店座敷の格子先に新しい簾を掛けたところにゐて寛（くつろ）いだ。

ここでも、金兵衛とお玉との会話が中心となっていて、㈢節はおよそ八千字、四百字詰原稿用紙（『夜明け前』の原稿用紙がそれである）に換算して約二十枚分相当の文章である。内容は表に示した

とおりである。ちなみに第一章全体を四百字詰原稿用紙に直すとおよそ百十一枚になるので、この初出稿の㈢節の約二十枚は二割に近い分量である。初出稿の㈡節の約四枚分、同じく㈠節の約八枚分に、㈢節の約二十枚分をあわせると約三十二枚になる。現『夜明け前』（初版本も同じ）では、結局、初出稿の三割に相当する叙述が削除されたことになるのである。その削除部分は、いま述べたように、ほとんど伏見屋金兵衛を主とした文章である。序の章は嘉永六年六月の黒船渡来の噂を聞いた金兵衛が〝「江戸は大変だといふことですよ」〟と吉左衛門にささやくところで終わっている。初出稿第一章の冒頭は同じ嘉永六年六月末ということであるが、そこで大きく描かれているのが金兵衛なのである。しばらくして初出稿㈣節で吉左衛門の登場となる。『夜明け前』は、当然ながら、その中心は青山吉左衛門であり、やがて青山半蔵である。したがって、現『夜明け前』にみるように、第一章の冒頭が青山吉左衛門の福島からの帰宅時の有様の叙述である場合なんら異とすることもなく、作品の展開もごく自然のものと看得されるのである。初出稿では副次的人物といえる金兵衛が正面に出ていたのである。そのあたりに、のち、初版稿本をととのえようとした藤村に大きく改稿（削除・訂正）への意志を起こさせた原因があるのではないだろうか。つまり、藤村が連載完了の昭和七年一月の時点で改めて第一篇をまとめた折、『夜明け前』の作品としての整合性をはかった結果、以上のような改稿となったのではないかということである。

㈣

事前に十分に想を練り周到に準備していたはずの藤村が、なぜ、のちに削除することになる㈡節から㈢節までを初稿に書いたのであろう。その原由を、私は藤村の「大黒屋日記」へのよりかかりの強さにみたいと思う。周知のとおり、『夜明け前』において、父の時代に分け入る自信を藤村に与えたのが「大黒屋日記」④である。それを藤村が抄録したのが「大黒屋日記抄」（以下、「日記抄」と略記）である。それをみる限り、『夜明け前』と「大黒屋日記」とのかかわりは、すでに序の章から密である。初出稿の㈡節～㈢節を「日記抄」にてらしてみても、そのかかわりは密接なものである。「日記抄四」には、嘉永六年六月十一日の〝黒船〟渡来の記事につづけて、〝○黒船、街道筋／六月十四日―浦川へ唐船八十六艘着いたし候様子。依之、尾州殿様御堅め役被仰付、御名代成瀬隼人正様御出張につき御家中方、今朝よりおびたゞしく此筋江戸表へ御通行有之候。／彦根様御家中も追々御通行被遊候。〟との記事をはじめに、〝○同上、街道筋〟の項の下に、〝六月十六日〟と〝六月十七日〟の二つの記事がある。それらの記事をもとにして、初出稿㈡節、

の金兵衛の見聞と感慨が叙述されているのである。初出稿㊂節のおまんとの間で交される、三留野の藤屋に入った盗賊のことは、同じ「日記抄四」に、〝○同上、盗賊の噂〟としてある記事そのままである。初出稿㊂節で金兵衛とお玉がまず話題にするのは、仙十郎・お喜佐の不仲である。

『さう言へば、お喜佐さんの噂は本陣で出ませんでしたか。』／『なんにも。』／『こないだの晩、本陣へお風呂を呼ばれに行きましたら、おまんさんからその話でしたよ。お喜佐にも困つたものです――どうもあれは夫婦喧嘩の味を覚えたらしい――なんて。』／これには金兵衛もすこし眉をひそめた。美濃の方の親戚から迎へた仙十郎を婿養子(むこやうし)とし、お喜佐をその若い妻として、上の伏見屋を持たせてから、まだそれほどの年月も経(た)つてゐない。／『まあ、わたしに言はせると、お喜佐さんもすこし疑ひ深いかと思ひますよ。あれはいつのことでしたつけ。わたしが仙十郎さんの羽織のほころびを縫つてあげたことがあるんです。見ると袖のほころびが切れている。その羽織が脱ぎちらしてある。わたしはそれを縫つて、黙つて元のところに置いてあげました。男のことだから、仙十郎さんは何も気がつかずに、上の伏見屋へ帰つたといふものです。お喜佐さんの言草がいゝぢやありませんか。「このほころびは誰に縫つて貰つた――よつぽど心易い女の人でなくちや、こんなに縫つて呉れない」ですとさ。わたしは後でその話を聞いて、反つて気の毒なことをした、とさう思ひましたよ。お喜佐さんはさういふ人なんですもの。』／お玉の話も、金兵衛はたゞ聞いて置く程度にとゞめて、そんな若いもの同志の夫婦喧嘩ぐらゐは気に掛けなかつた。

（初出稿による）

とある。この夫婦の不仲の叙述は、第二章の初出稿にも詳しく書かれるトラブルの伏線をなす部分である。そのことは後述することにして、つぎの話題である、金兵衛の鶴松への心くばりをみることにする。

この金兵衛には一人の秘蔵子息(ひぞうむすこ)がある。鶴松といふ名で、数え年十一になる。お玉を母親とする鶴松は、金兵衛が四十七歳の頃に出来た掛け替えのない一粒種である。（初出稿による）

と、まずあり、その〝一粒種〟が〝世にも弱く生れついて来た子供〟であるゆえの金兵衛の一通りでない子煩悩ぶりの例として、〝鶴松のために注文した秋の祭の狂言の大小〟の到着を喜ぶ金兵衛を、

『お玉、鶴の刀が出来て来たぜ。これさへあれば、あの子にはどんな狂言でもさせられる。』／吾が児に村の舞台を踏ませる折のことを想像して、金兵衛はその楽しい考へをお玉にまで分

けやうとした。／『俺はこんな馬鹿な男だ。』／とまた金兵衛は言つて、子供用の大小を抱きながら店座敷のなかをあちこちと歩いた。（初出稿による）

と描いている。その鶴松の〝本陣への入学〟すなわち半蔵への弟子入りが、つぎに話題となりその入門への金兵衛のためらいが、半蔵の病気と鶴松の弱さとのからみの中で書かれている。

〝狂言の大小〟については、「日記抄四」に、〝○昨二十五日名古屋升〔竹〕九店政蔵参り刀拵へ并に春七狂言大小出来につき二品共受取。（略）〟とあり、半蔵への弟子入りは、同じ「日記抄四」に、〝○本陣へ入学／二月十二日吉日、入学につき春七本陣へ遣す尤も寿三・鎮太郎共参り候。土産として八幡屋両家にて餅米三斗・小豆五合のし相添進上いたし候。（略）〟とある記事、および「日記抄三」に〝○同（消息—鈴木注）／三月十日—春七本陣へ本読みに差遣申候〟とある記事にヒントを得ながら、四ヶ月前の既定の事実を現在のこととして描いている。入門のことは、右の引用以外に、初出稿㊂節の末尾に、次のようにある。

金兵衛は結局吾が児の願ひを容れずにゐられないやうな、いつもと同じ彼自身を妻のお玉の側に見出すやうになつて行つた。吉日を選んで、本陣へ鶴松をあげやうと考へてみるやうになり、もし枡田屋の子供の入学が事実なら、土産として、餅米の三斗に小豆の五升ぐらゐは二軒の家で心掛け、それに熨斗でも添へて贈らねばなるまいとも考へるやうに成つた。本陣への入学は、可愛い子供の願ひであるばかりでなく、学問の師匠と頼むべき人もまたこの村には年若な半蔵以外に見出せなかつたからで。（初出稿による）

半蔵の病気は次のように書かれている。

『まあ、俺の話を聞けよ。俺もこの隣家に住んで、あの人のごく幼少い頃からのことを知つてるが、もう十六ぐらゐの時分に大概の本は読んでしまつたといふよ。なんでも一度、『うゝん』といふ唸り声を出して、あをのけさまに後方へ倒れたことがあるさうだ。学問に凝ると、そんなになるものかねえ。吉左衛門さんが驚いて見に行くと、蒼白な顔をしてゐたといふ話さ。その時、吉左衛門さんも思ひついて、あの半蔵さんを一つぶん擲つて見たそうだ。「お前のやうに本が好きだつて、それではまるで学問に縛られてるやうなものだ」——さう言つたさうだ。それから半蔵さんも思ひ直したと見える。俺はまだあの本陣の親子が三河の方へ旅に出掛けたことを覚えてる。あの時だつて吉左衛門さんは心配して、自分の子は気でも違うんぢやないか、こんなことで馬籠の本陣の後が継げるかと思つたそうだ。ちやうど年の暮のいそがしい時分に、吉左衛門さんは会所へも顔を

見せず、自分の子は病気だからといつて、しばらく引籠つてゐたこともある。豊川稲荷の参詣をかねて、半蔵さんを連れ出したのも、あの時の旅さ。（略）』（初出稿による）

この半蔵の病気のことは「日記抄」ではかなり詳述されている。「日記抄三」の嘉永四年末に、〝○消息―／十二月十六日―禎蔵〔禎三郎〕殿病気差起り。／十八日―禎蔵殿今朝より又々差起強く候につき本陣へ見まひ相詰申候。〟〝二十二日―寄会所村勘定日、吉左衛門殿は家内病人につき当冬勘定には御出勤無之候。〟〝○〈廿九日〈十二月〉〉（略）本陣禎蔵〔禎三郎〕殿病気につき本陣年詞峠村例年正月二日のところ来る二月朔日まで差控候やう〈峠〉村中へ申渡候。村中の年詞も会所にて取次き相済し申候。（略）〟とあり、翌五年のはじめには、〝○消息―／閏二月六日―／吉左衛門より禎蔵病気未だ全快の姿もなく相続方無覚束心配につき、問屋役の儀しばらく仲間内にて勤めてくれよとの願書差出し〟〝三月六日―本陣禎蔵〔禎三郎〕病気全快、町内へ礼廻り。〟とあるあとに、〝○消息―／本陣親子（八月五日）東海道藤川宿へ〔在〕羽栗村医師等に豊川様参拝をかねて今朝釜戸村泊りにて出立〟〝○消息―／十月十六日―本陣禎サ快気振舞〟ともある。これらの記事をもとにしていることは明白である。

仙十郎とお喜佐の夫婦の不仲は、現『夜明け前』では、第一部第一章の一の、吉左衛門と金兵衛との会話の場面に、仙十郎が吉左衛門の前で、〝妙に改まつてしまつて、茶も飲まず〟〝何か気づまりで、〟〝ちつとしてゐられないやうな風で、やがて出て行つた〟と書かれてあること、同部第二章の五で、お民が兄寿平次に、〝「兄さん、お喜佐さんも呼んで来ませうか。あの人も仙十郎さんと別れて、今ぢや家にゐますから。」〟ということのなかにそれとなくうかがえる程度である。ところが、初出稿では、前述したように、三節で少しふれたあと、第二章の四（現『夜明け前』第二章の三）の末尾では、半蔵の街道に立ちつくす姿を描いたあと、次のように書かれていたのである。

十二月に入つても、江戸から焼け出されてきた人達はまだぼつ〳〵この街道を通つた。（略）この周囲の空気の中で、吉左衛門と金兵衛との間には、意外の出来事が絡んで来た。（略）事の起りは、すでに一人の男の児まであるこの若夫婦が激しい争ひにもとづく。長いこと隠されてゐた仙十郎の浮気沙汰も、お喜佐が中津川の歯医者へと馳けつけたことからばれて来た。

半蔵は腹ちがいの妹のことを心配して、父や継母のゐないところへお民を呼んで言つた。

『お前も聞いたかい。お喜佐は口惜しがつて仙十郎さんの腕に齧りつく。仙十郎さんも堪らないから、足でお喜佐の腿を蹴飛

ばす。すると、お喜佐の前歯が一枚欠けてとれたなんて。えらい喧嘩もあるもんぢやないか。』
『なんでも去年のお祭からだそうですよ。あの狂言の晩に、お喜佐さんは仙十郎さんを探して歩いたそうですよ。』
『狂言も崇るなあ。』
『さう言えば、お喜佐さんもどうなさるでせう。』
『どうしようもあるまい。結局、吾家へ戻つて来るものと俺は見てる。』

街道へは毎日のやうに雪がちらついた。半蔵夫婦は親達の顔を見るに見かねて、蔭ながら二人で心配してゐる間に、お喜佐は中津川で入歯の治療をすまして来て、それぎり夫の許へ帰つて行かなかつた。仙十郎は仙十郎で、組頭もつとめもうつちやらかして、しばらく村から姿を隠すなぞのごた〳〵が続いた。この解決はどうつく。さう思つて半蔵が気をもんでゐると、上の伏見屋の土蔵の二階にあつたお喜佐が衣裳から諸道具まで、荷物は一トまとめにして本陣の方へ引き渡されて来た。
『まあ、お喜佐さんはそれでいいとしても、子供はどうなるでせうねえ。』
とお民は半蔵に言つた。第三者の仲に入つたことや、美濃から人の出て来たことやで、上の伏見屋の関係は断ち切られた。親としての吉左衛門が多くの望みをかけた一人娘の結婚生活も短い終を告げた。お喜佐夫婦は全くの赤の他人となつた。しかし二人の間に生れた子供の問題は依然としてそこに残つてゐた。

（初出稿による）

この叙述は、「日記抄四」（安政二年）に、

○又右衛門とお雪

十二月〔十一月〕十三日―少々雪降り。又右衛門義頃日中身持宜しからず候につき、家内に引籠り居候処、如何やう之了簡にや今朝夜明方に家出欠落被致候。追々近所のものに聞合せ候処、一石栃に休み、それより駕籠を乗参り候様子、下町茂平知らせにつき、惣治追手に参り呉れ候。尤も中津川おらい方へ使差遣し早々此方へ参り候やう申遣候。誠に言語同断ふラチの致方に御座候。勘弁無之候。（略）
同十四日―雪少々。寒強し。又右衛門迎へに二人のもの広瀬まで差遣申候。おらい参り候につき、お玉と上大黒屋へ参り、土蔵二階衣裳并に諸道具相調べお雪どの荷物本陣へ相渡し申候。（略）

とあるのに、一部拠っている。また、「『夜明け前』ノート」に、

お雪おばさんの話
養子千十郎の耳に熱湯

（嫉妬のあまり――）

とある聞書きがヒントにもなっている。

「日記抄四」には右の記事につづけて、

○同上

十二月〔十一月〕二十六日―雪降。夜大雪。

又右衛門小児共中津川へ参り候。尤駕籠にて、おはつ〈付添〉笹屋惣助も同伴。

さて又右衛門小児引連れ、あら町まで参り候処、本陣お雪どの追かけ小児中津川へやること中々承引無之、途中にて駕籠のもの止メ、暫く口論に相成り、よんどころなく木引亀蔵宅に這入、それより種々談判に及び候得共、片付不申、然る処、本陣よりも格別お雪どのに呼迎え候事も不致如何の了簡に候や。それより夜四ッ時頃李助……〔・勝七〕参り呉れ、取扱に相成り、弥々小児本陣へ来正月まで預け候向に相成り又右衛門始めおはつ一同夜八ッ時頃自分々々の宅へ帰り申候。誠に面目次第もなき儀に候。本陣御夫婦の思召如何御了簡に候やその意を得ず、甚以て不都合の始末と残念至極、おらいも立腹致され、又右衛門了簡も頃日中とは大相違に相成、何共訳合相知れ不申候。言語に絶申候。（略）

○同上

同二十八日―又右衛門少々乱心に相成候様子につき、本陣より子供請取り、中津川へ差遣申候。二人付添、駕籠人足二人。

とある。この記事に拠り、『夜明け前』では、前引の部分につづけて、

その年も押し詰まる頃には、仙十郎は馬籠の組頭を辞し、上の伏見屋を辞し、義理ある叔父の金兵衛にも別れを告げ、幼い男の児を一人連れて中津川の方へ去らうとする人であつた。

『お喜佐さん、どこへ行くの。』

とお民が声をかけた時は、日はとつぷり暮れてゐた。お喜佐はろく〳〵返事もしなかつた。本陣の門口を出ると直ぐ、お喜佐は尻端折りになつて、下駄も脱ぎ捨てた。深い雪は街道を埋めてゐた。お喜佐はその雪の道を足袋跣で踏んで、上の伏見屋から出た三挺の駕籠のあとをつけた。石屋の坂から橋詰まで追つて行つて、夜道の雪に映る提灯のあかりに近づいた。到頭、荒町のはづれまで行つて、その駕籠に追ひついた。

『その子供はやりません――中津川へはやりません――このわたしが承知しません。』

幼児をとられまいとする母の一心から、お喜佐は子の乗物に取り縋つた。その中津川への一行が途中で駕籠を停めるまでは、あの木挽の家の戸を開けて貰つてそこで談判を始めるまでは、お喜佐は一歩も譲らうとしなかつた。この事が伏見屋へ聞えて、

一切の取扱ひを蓬萊屋の亭主に任せたのは、その夜の四ッ時頃であつた。兎も角も子供は来年の正月までお喜佐の方へ引き取ることになつた。そこまで争ひを持つて行つて、仙十郎その他を載せた駕籠が中津川の方へ行き着くまでには同じ夜の八ッ時までかかつた。

二人の隣人――長い間の友達同志であり、相談相手でもある吉左衛門と金兵衛に取つても、この事はなかなか笑つて済ませなかつた。

『お民。』

半蔵は、翌朝妻と共に眼をさましてから、先づその事を言ひ出した。

『金兵衛さんもひどい立腹だと言ふぢやないか。本陣夫婦の量見が解らん、どうも残念至極だなんて、お隣ではそんなことを言つて、中津川から来た親類の女の人まで立腹していると言ふぢやないか。どうして本陣ではお喜佐を呼び留めによこして呉れなかつたらう。それがお隣の言ひ分らしい。』

『あのお喜佐さんが、そんなことを聞く人ですかい。』

若い夫婦は顔を見合せて、互いにはら〳〵した。たつた一人の子供のために、これほどの気まづさが二軒の家庭の内部へ侵入して来ようとは、何十年となく互いに助け合つて来た村の二本の大黒柱を揺り動かすやうな力が、又、あんな幼くかよわいものの手にあらうとは。おまけに、お喜佐はお喜佐で、あれほど激しい夫婦喧嘩はしても、その実、仙十郎にホレてゐるなどと、そんな余計なことを触れて歩く物数寄な手合もある。

吉左衛門は半蔵を見て、子の側で嘆息するやうに言つた。

『仙十郎は浮気者、お喜佐は焼餅やき――どうなるものかい。』

（初出稿による）

と、より密着した叙述がなされている。そしてこのあとにつづけて、初出稿では第二章の五（現『夜明け前』では第二章の四）のはじめの、安政三年の牛方事件の叙述の前、半蔵がお粂の父となったことの書かれる直前に、

正月のある晩、お民は本陣の家のものも皆寝沈まる頃に、お喜佐の寝部屋の方で聞きなれない物音を聞きつけた。暗いところで男女の闘ふ音が起つた。眼をさまして泣く子供の声もその間にまじつて聞えた。お民は直ぐその意味を読んで、半蔵を呼び起し、親達にもそれと知らせた。中津川の方から忍び込んで来て、子供を奪ひ返さうとした仙十郎の逆襲であつた。

隣家の伏見屋で、殊に昔気質の金兵衛として、これが黙つて視てゐられる筈もない。夜中に人をよこして、仙十郎を連れに来た。その時、吉左衛門も仙十郎の心持を汲んで、兎も角も子

供は男親の方へ引取らせることにお喜佐を言ひなだめた。こんな人騒がせな仙十郎の態度から、暮以来吉左衛門を見ても好い顔をしなかつた金兵衛の心もとけるやうになつた。

『正月早々、縁起でもない。』

いま〳〵しさうな吉左衛門の言草だ。（初出稿による）

と書かれている。それが「日記抄五」（安政三年）の

○又右衛門とお雪

一月十八日――寒気、少々雪ふり

又右衛門癇起り、昨夜本陣へ参り、新座敷へ忍び込、甚た以てフラチ千万之次第につき、皆々立入召連れ、上大黒屋へ送り候。

とあるのに拠る。以上の三箇所の叙述が現『夜明け前』ではすっかり削除されてしまっているので、次の箇所（第一部第六章の四）がまた分りにくい一節となっている。

「俺の長い道連れはあの金兵衛さんだが、どうやら喧嘩もせずにこゝまで来た。また何十年の間、俺は殆んどあの人と言ひ合つたことがない。唯二度――さうさ、唯二度あるナ。一度はお喜佐と仙十郎（上の伏見屋の以前の養子）の間に出来た子供のことで。（略）」

こうして、仙十郎とお喜佐のトラブルは、半蔵の身辺の、義兄妹の事件として初出稿には大きく描かれながら全部削除され、現『夜明け前』ではわずかにそのあとがみられるだけである。それらの削除も、前述の第一章の㈠節、㈡節の削除と同じく、『夜明け前』の作品としての整合性からみて、初稿時の、「大黒屋日記」への過度の依存がもたらした余事の刈み込みを必要としたことに、その理由を求めることができるのではないだろうか。

半蔵の病気に関する部分はどうであろう。第一部第一章の二（初出稿では同章の八）に、〝早くも青年時代にやつて来たやうな濃い憂鬱が半蔵を苦めた〟とあるところにわずかに半蔵の精神状況がしのばれ、他の箇所では内省的で、黙りがちで、夢の多い、よく嘆息する半蔵が描かれているのである。それはやがて理想（夢）と現実のはざまで呻吟懊悩する半蔵へとつながる。『夜明け前』を目ざめた知識人青山半蔵の悲劇を描いた作品とするならば、その悲劇を悲劇たらしめるためには、初出稿㈠節の〝気でも違うんぢやないか〟とまで父吉左衛門を心配させた病気にふれた部分は、結果的になくもがなの一節であり、削除されて然るべき箇所であったと考えられるのである。

〈注〉

① 『国語国文学論集』松村博司教授退官記念　名大国語国文学会　昭48・4刊

② 筆者の照会に対する、中央公論社資料室の返書による。

③ 筆者の照会に対する、藤村記念館の松原常雄氏の返書による。

④ 「覚書」（『桃の雫』所収）

〈付記〉

Ⅰ、藤村の文章の引用は、新潮社版『島崎藤村全集』、筑摩書房版『藤村全集』、「中央公論」の初出稿によった。ただし、漢字はなるべく新字体にあらためた。

Ⅱ、本稿は、昭和五十六年度日本近代文学会関西支部秋季大会（於　帝塚山短大）における講演（〝『夜明け前』第一部第一章について〟）に手を加えたものである。

―一九八一年十二月二十四日―